20240918　大塚雅之

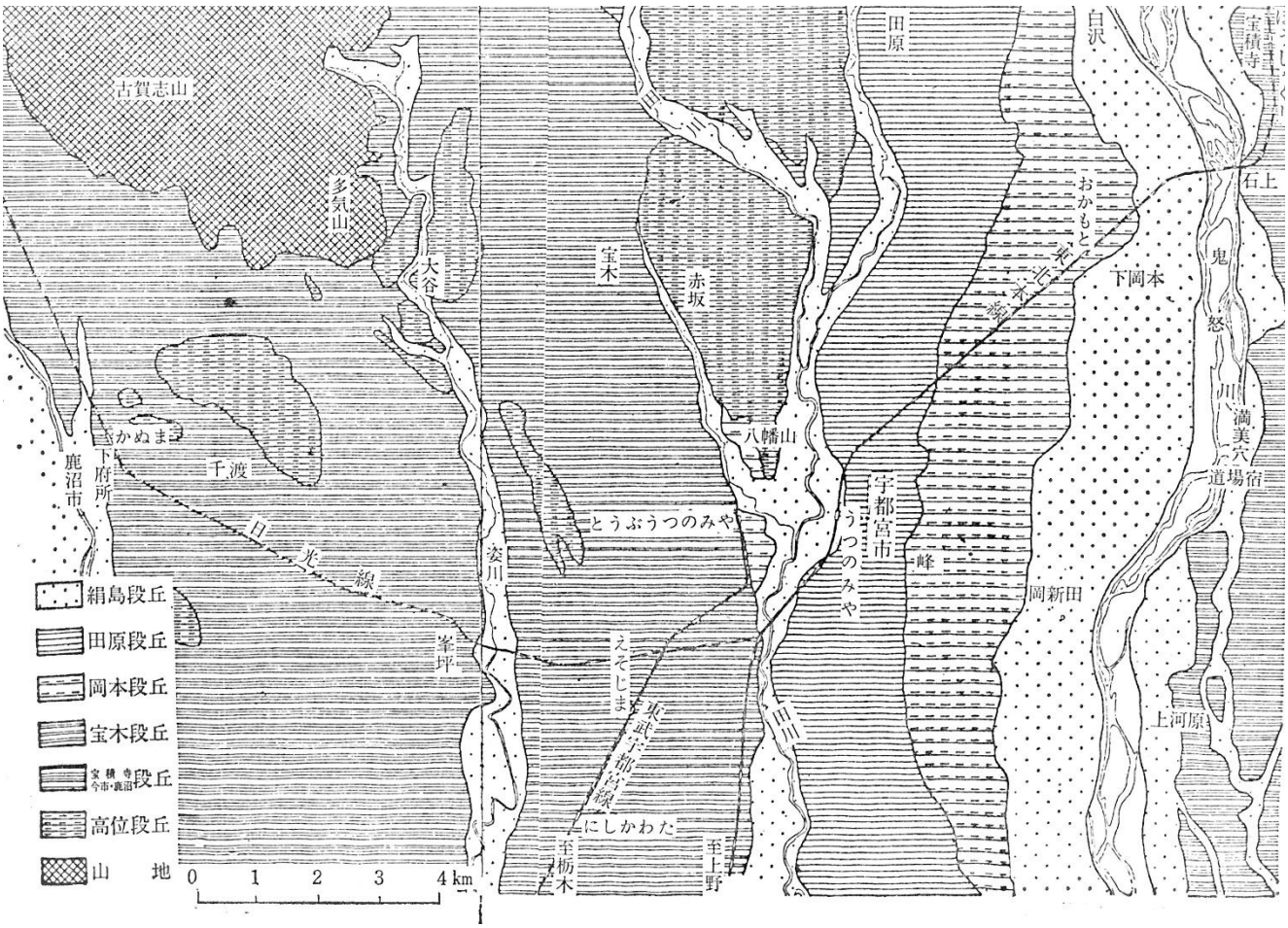
第６回「宇都宮江戸時代歩き地図」講演会

～地形・水系から見た城下町　宇都宮の成り立ち～

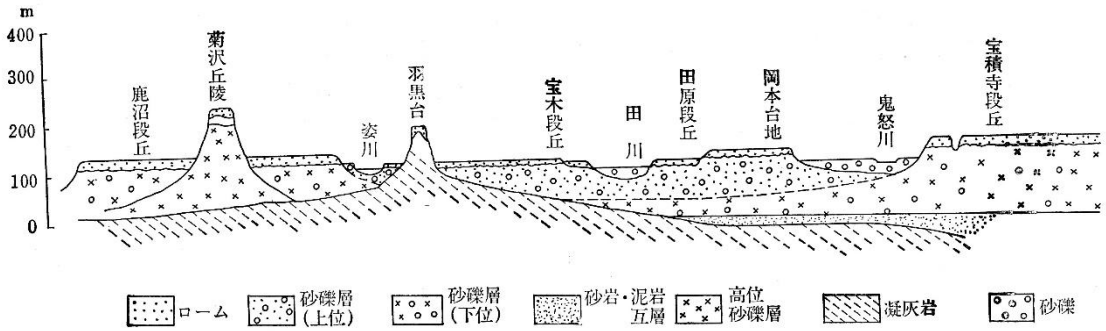
◇宇都宮の地理的特徴

・平坦性：関東平野の北限　洪積台地と沖積平地がほぼ半々
　　平地林(ヤマ)が多く，工業団地や住宅団地，市街地の拡大が容易

・渓口性：河川が山間部から平野部に出る部分のこと　⇒　扇端
　　日光から宇都宮にかけて，複合的に扇状地が形成
　　「七木七水八河原」　良好な湧水地　河岸の遡航終点



宇都宮付近の段丘図　『宇都宮市史』



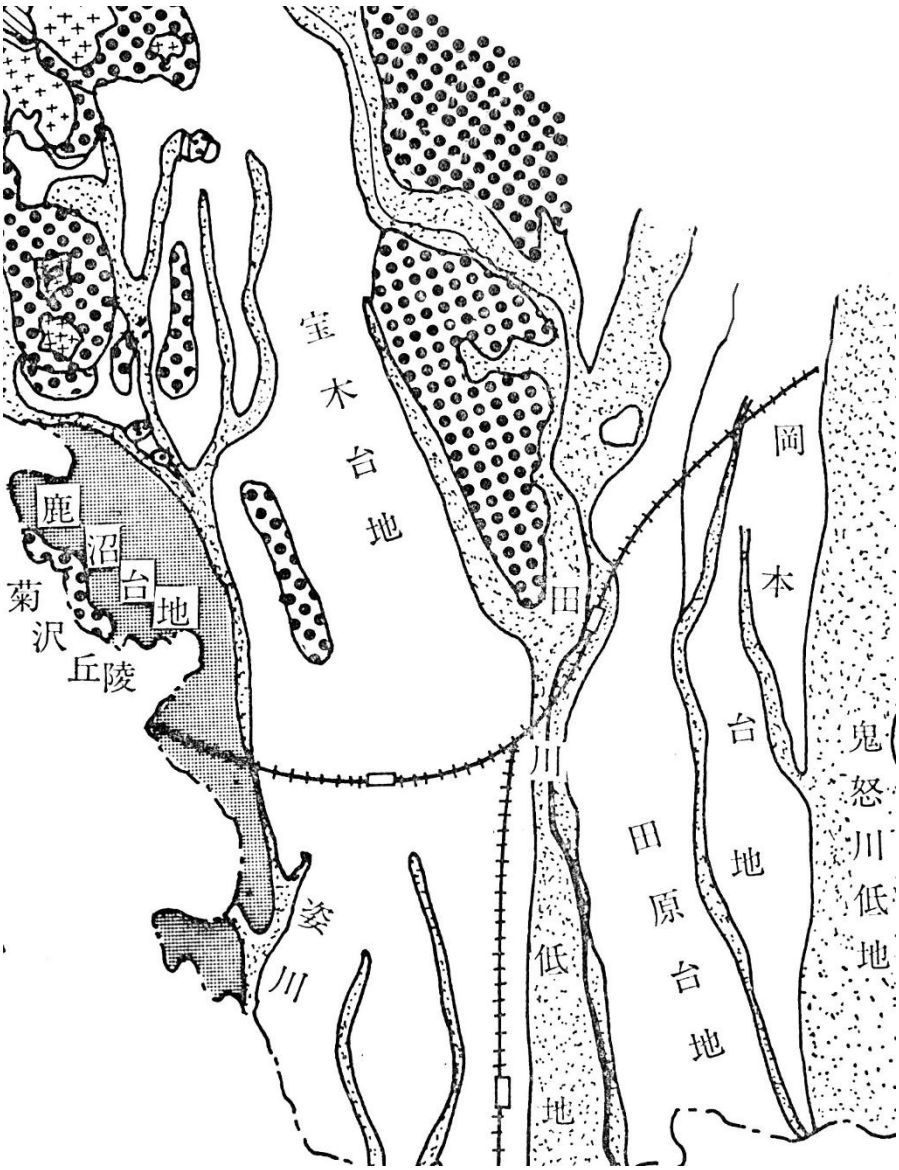
地層断面略図　（鹿沼－宇都宮駅－石井）　『宇都宮市史』

◇宇都宮（市街地周辺）の地理的特徴

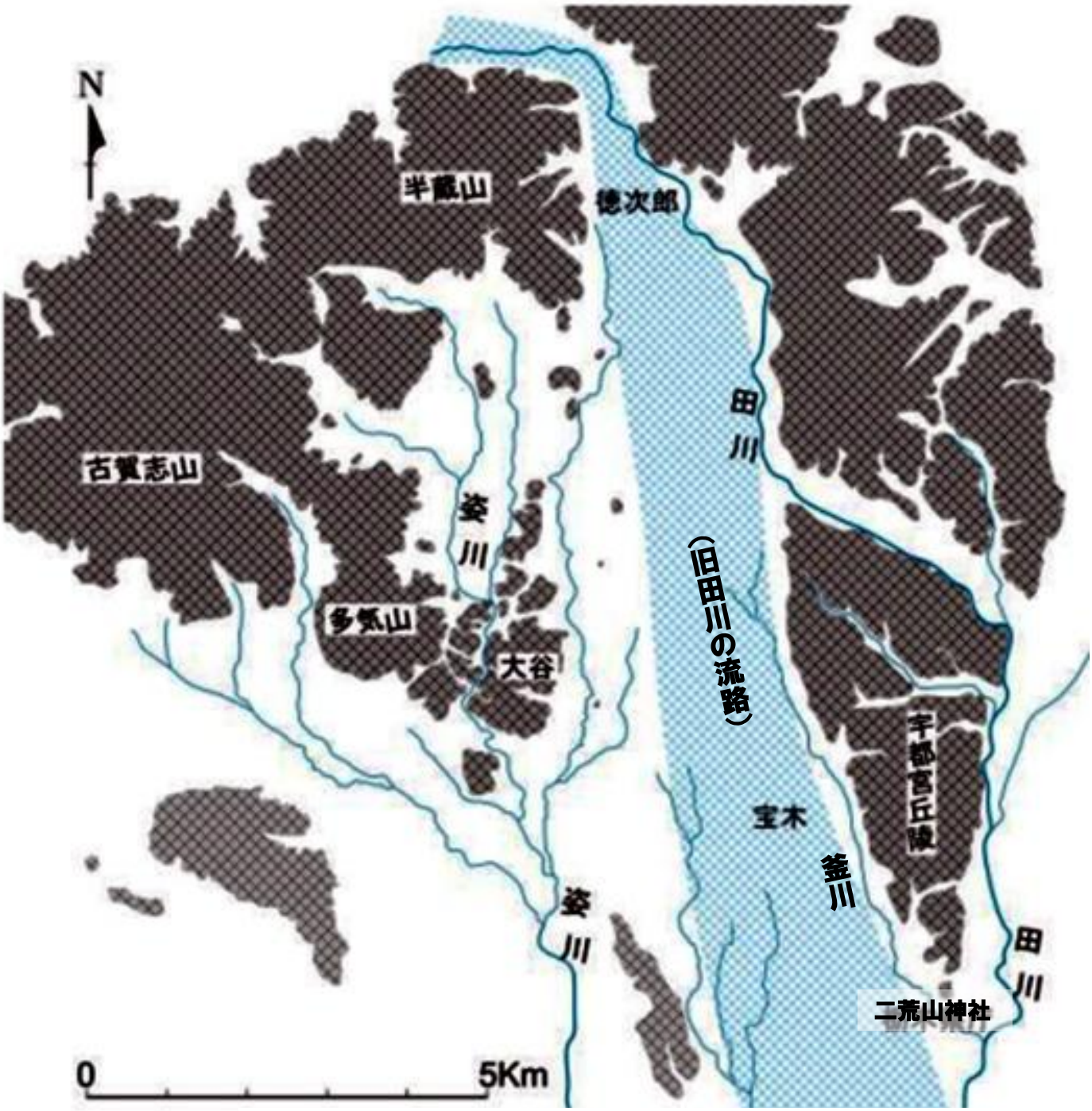
・丘陵：宇都宮丘陵南部　横山地域の田川より南の逆三角形
（市立美術館，帝京大学，水道山，八幡山，県庁（二里山），二荒山）
標高は１６０～２０５ｍ　平地から比高４０～６０ｍ
主に開析谷は東側，田川に沿って側方浸食があり，急崖を形成

・台地（平地）：河川と台地が交互に南北方向に連なる
宝木台地（段丘）　田川と姿川に挟まれた台地　分水界は東偏
岡本台地（段丘）　宝木面の一部（やや低い）　宇都宮城址公園の東西
田原台地（段丘）　田川の東　一部には風成ロームを持たない

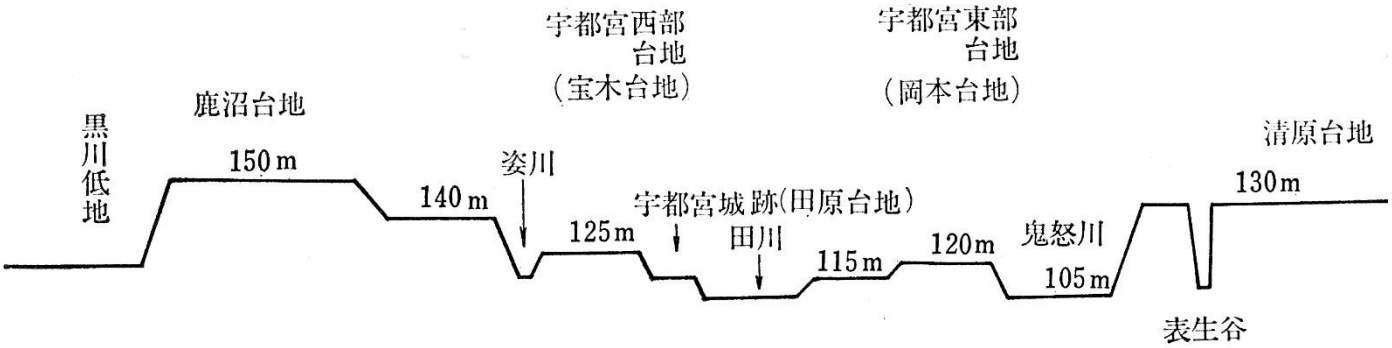
・低地（平地）：河川の沿岸に成立した沖積低地　南北に連なる
田川低地　田川に沿って発達した谷底平野（狭い）　蛇行　暴れ川
（釜川低地）　田川の支流　地質時代の田川流路の名残り



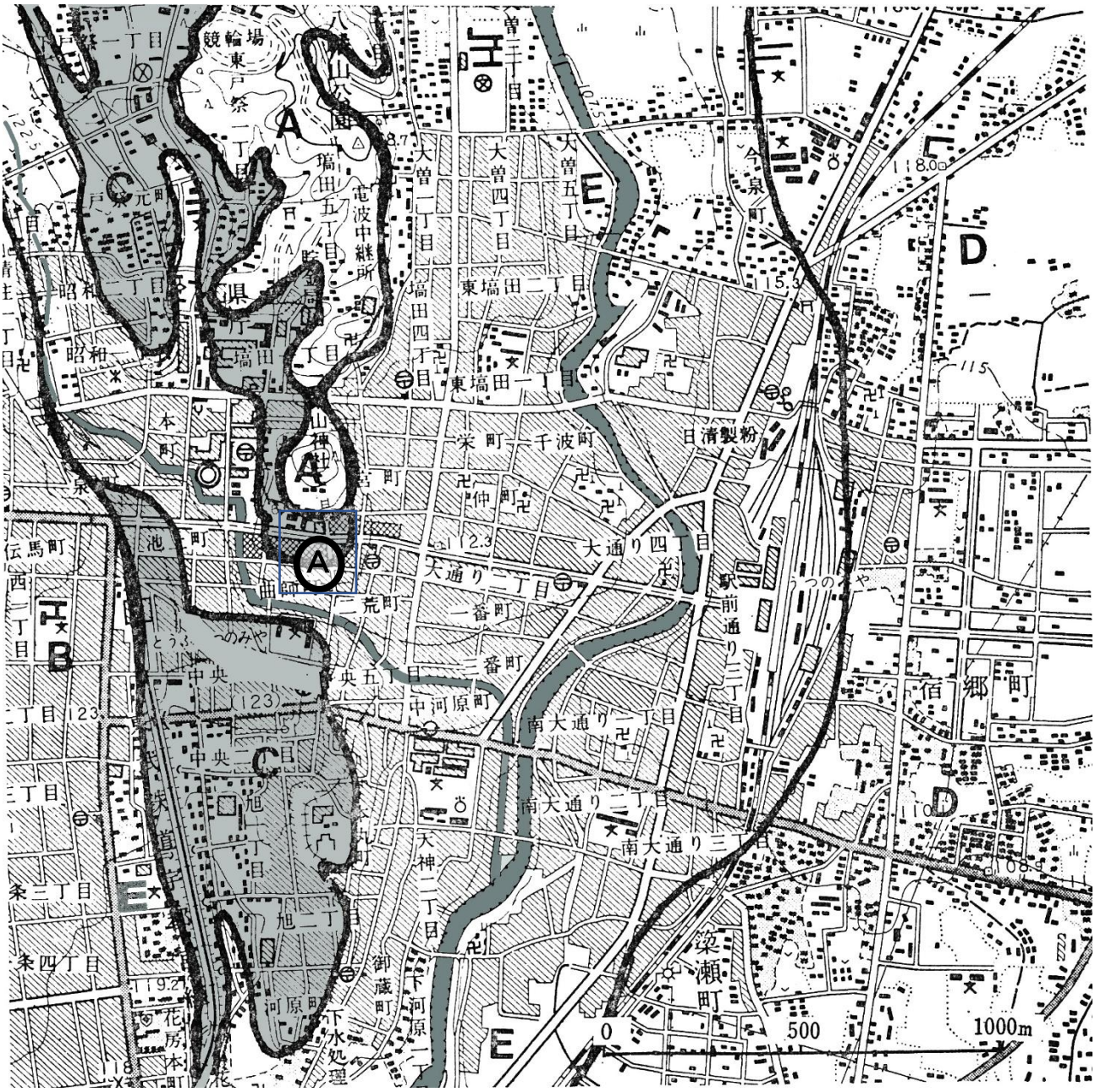
地 形 図　　『宇都宮市史』



約１０万年前の旧田川の流路　　（『大谷石文化への誘い』改写）

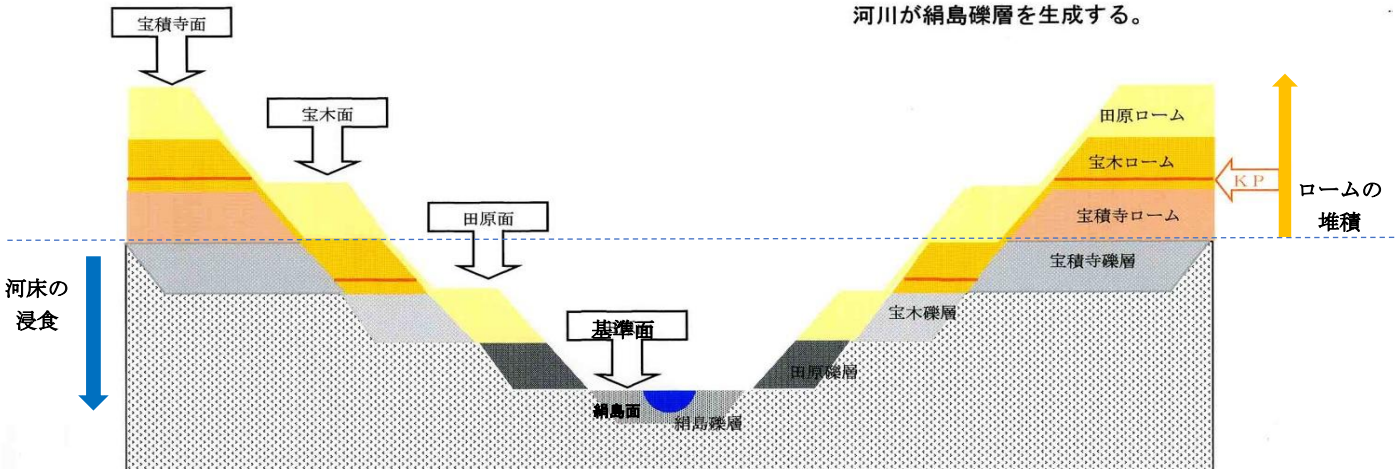


地形断面模式図　　『栃木の地質をめぐって』（改写）



A：宇都宮丘陵　　B：宝木台地　　C：田原下位台地　　D：田原台地　　E：田川低地

宇都宮中心部の地形概要　　『宇都宮市史』（改写）



段丘の生成モデル

◇二荒山神社

宇都宮丘陵の南端に位置し，古くは宇都宮明神と呼ばれた　⇒「征討の宮」か？
・崇神天皇の第一皇子豊城入彦命(武人)が毛野を支配し，荒尾崎に大物主命を祀った
・下毛野氏の管理，影響下
・７世紀に始まる蝦夷開拓(蝦夷征討)の前線基地：
・838 年荒尾崎から臼が峰(明神山)に遷座
・池邊郷（中世宇都宮の古名）の鏡ヶ池のほとりに社が建てられた
・古代下野の二荒山神社は「正四位下勲五等」　勲位は武運を祈祷し戦勝を感謝するもの
・「東路や　多くの蝦夷平げて　叛けば討つの宮とこそ聞け」『新式和歌集』(1259)
・敵を討ち給ふ神なれば宇都宮とぞ名附けたり」『日光山縁起』(室町中期)
・前九年の役(1051-1063)の際，源頼義のために安倍氏討伐の戦勝祈願をした藤原宗円が，その功績から社務職と下野守護職となり，宇都宮氏の祖となる

◇奥大道と小田橋（古多橋）駅

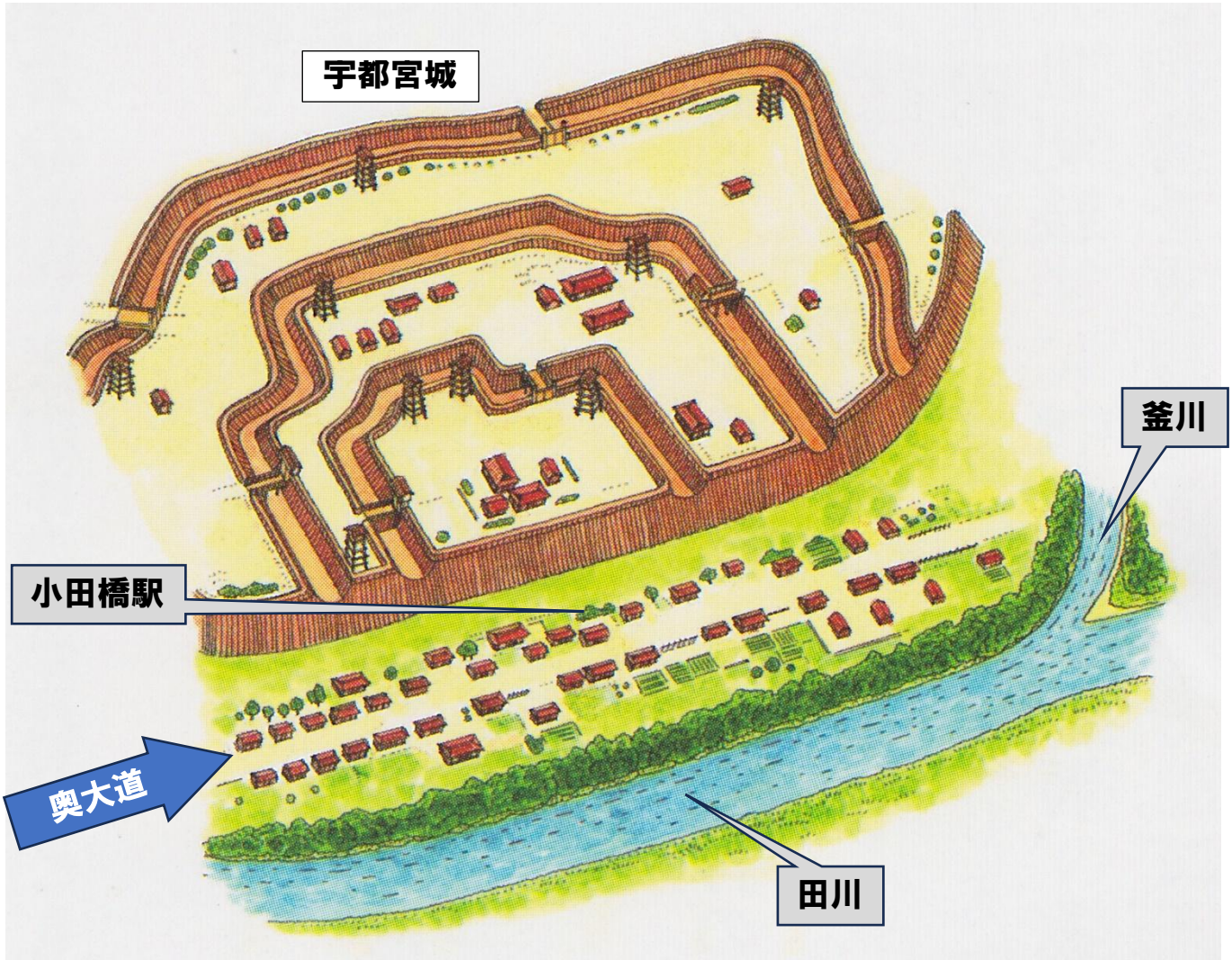
・小田橋驛　鎌倉期に見える河内郡の地名で，「古多橋」とも書く　『吾妻鏡』には，文治５年７月 19 日，鎌倉を発し，奥州征討の際，源頼朝は同月 25 日「下野国古多橋駅」に到着，二荒山神社に奉幣している
⇒１１８９年７月２５日　奥州合戦　『吾妻鏡』
「二品下野の国古多橋の驛に着御す　先ず宇都宮に御奉幣御立願有り
今度無為に征伐せしめば、生虜一人神職に挙ぐべしと　則ち御上箭を奉らしめ給う
その後御宿に入御す。時に小山下野大掾政光入道駄餉を献る。」
（頼朝が軍勢を率いて下野国古多橋の駅に到着　まず宇都宮明神に奉幣して立願を行なった
今回の奥州征伐が無事に終われば捕虜にした者を一人神職（として奉仕する奴婢）に進呈すると述べ鏑矢を奉納した　その後宿に入り、小山下野大掾 政光入道が食事を献じた）

また，「宇都宮弘安式条」中には，駒牽到来送夫事の１条があり，駒牽人夫については，「上河原・中河原・小田橋為彼宿々役，守結番，随奉行之催促可勤仕其役」とある
『下野国誌』は「古多橋は大系図に小田橋と書す，今は押切橋と唱へ，長さ一五間，田川にかかる，其所を小田町と呼ぶ」
『地名辞書』は「今按，押切橋と小田町は一地にあらず，其橋東を宿郷町と云ふは，もしくは古宿駅にやされど，宇都宮氏の城主たりし頃には，上河原・中河原・下河原は，まさに城下の駅路にして，駅市の中心は上河原町・押切町・大町・石町の辺と想はるれば，やがて之を汎称して，古多橋駅とも呼ばれしならん」
『尊卑分脈』では，宇都宮一族 掃部助時村に「於宇都宮小田橋被誅了」と註記がある
市内の伝承によれば，亀井の水（現西原町）の北の小川の橋を古多橋といったという

※中世の幹線道路「奥大道」の宿駅「小田橋」は，後の地蔵堀から流れる川を渡る橋の辺りにあったとされている　現在の「亀井の水」付近と思われる　この他にも「上河原」「中河原」にも宿があったとされる
※宿の西の崖上には，宇都宮氏の館（宇都宮城）があったものと思われる

◇宇都宮氏の館

・939 年　平将門の乱　藤原秀郷が宇都宮大明神に戦勝祈願をした際，安倍晴明に城の縄張りを決めてもらい地鎮をしてもらったという伝説
・前九年の役(1051-1063)の際，源頼義のために安倍氏討伐の戦勝祈願をした藤原宗円が，その功績から社務職と下野守護職となり，宇都宮氏の祖となる。後三年の役（1083）で義家説も
・初期の館の位置　御橋より南　現在の城址公園近辺？
⇒宗円は武士でなく，神官　臼が峰付近には館（山城）を作らず
館を構えるには，神社より低い位置に　　御橋で禊？　　宇都宮城址公園近辺か
近くの奥大道　経済，流通を把握できる
・１２世紀頃　宇都宮に多くに軍事貴族が集まってくる（紀氏，中原姓宇都宮氏，藤原姓八田朝綱，佐々木定綱）奥州での政情不安定に備えるため？
⇒宇都宮の軍事都市化　経済，産業の発展（小田橋・中河原・上河原）　　兵站基地化
・初期の館の位置は？　御橋の北側は沼沢地か？(釜川低地と鏡が池)
⇒中央小付近から南が田原台地下位面　→　さらに南（現：本丸の位置）が田原台地高位面
⇒御橋から北；高い峰の上に宇都宮明神　御橋から南；緩やかな台地上に宇都宮氏館



中世の宇都宮城の復元イメージ

◇釜川

・現在は，天神町(菅原神社)の東で，田川に合流する。
・平安時代　「宿の近くに奥大道に平行して，人口の水路が引かれ」**『中世の名門　宇都宮氏』**
　⇒踏査によると，下河原で田川に合流する旧河道の存在　⇒　現河道に付替えか？
　釜川下流(田川との合流井地域)は低湿地　池邊郷
・御橋　中世宇都宮館から宇都宮明神に参拝する際の釜川での禊
・釜川＝賀茂川？(近世の地図表記)　京との関連性
・宇都宮城の堀の水源は，釜川からなのか？　⇒　ほほ地下水

◇求食川(あさりがわ)

・『大日本地名辞典』(M33)八幡山の東麓なる野水の末なるが，塙田成高寺の西南を鐃りて南下し，市中に入り釜川と合い，末は田川へ入る。○国志云，鴛鴦塚は大町の中程の，南側の商家の裏にあり，いと古き六角の石塔に，六地蔵え彫付て建たり，その傍らの少しの流れありて，求食川と呼ぶ，その水上は求食沼とて，二町ほど北の方なり，
　⇒おしどり塚以北の大町，大工町，新宿町等に存在する沖積地　⇒　広大な低湿地(池邊？)
・あさり沼　慈光寺の南東，小田町の北側『宇都宮真景図』(明治 30 年台)
・西求食川の直角屈曲(県庁前通りから赤門通りへ)　流路開削の可能性　近世の町づくり？
・西求食川，中求食川，東求食川の名称　一万分一宇都宮航空写真測量図．1:10000．建設省，1949.4．80×110cm．**【YG1-Z-437】※刊行は戦前ではありませんが、「本図ハ戦災復興ノ為貸与セラレタル、米国陸軍空中写真ニ依リ編纂ス」と注記されています。図の中央右寄りに「西求喰川」、「中求喰川」、「東求喰川」の記載があります。(レファレンス資料 文化財ボランティア協議会 坂本 明氏提供)**

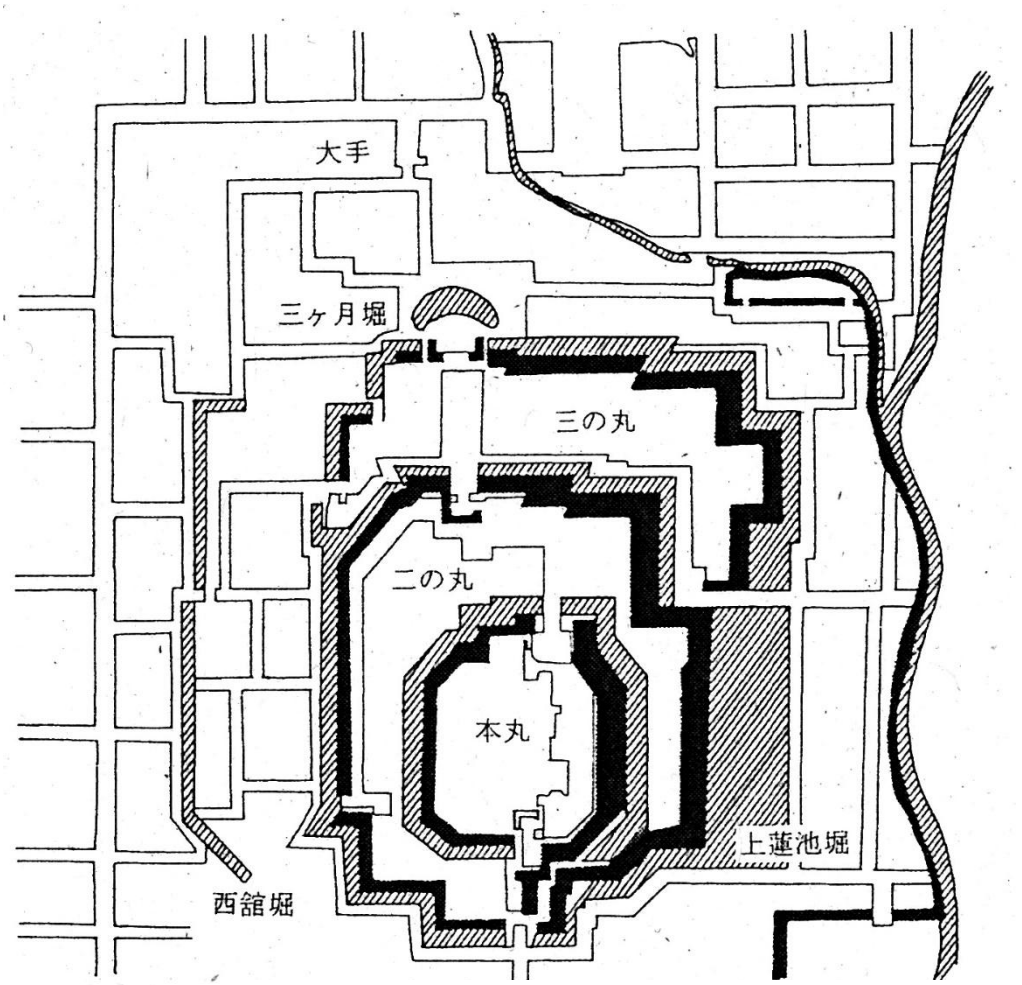
◇町家の形成

・田川に平行して奥大道　それに沿って宿場が成立　古多橋，中河原，上河原
　博労，鍛冶職，交易の場　交通の要衝　食料や消耗品を調達する兵站基地の役目
　特に上河原は，宇都宮社の神職層が開発に関わった可能性『中世の名門　宇都宮氏』
　⇒明神前の門前町の形成

宇都宮城
南東の石垣

◇近世の城づくり

・中世の縄張りは不明
・中世から城の縄張りがどのように引き継がれたか　　地形に大きく影響されている
本多正純による城下の大改造(奥平家昌，忠昌からの城下改造着手の可能性)
⇒北側の防御：▹中世では城の北側は明神　聖域方面からの防御形態については不明
近世初頭の上杉景勝や伊達政宗の動きもあり，宇都宮城の正面は北側に
大手門を西側に移す
⇒東側の防御：▹蓮池，下蓮池　絹島面の掘削(沖積面よりやや高い)
堀に蓮を植える(レンコンが防御に)
▹唯一の石垣，二の丸犬走　東側からの攻撃に対処
⇒南東側の防御：田川，釜川　堀や土塁もやや低め(大鳥圭介の回想)
⇒南側の防御：南館堀　江戸の方角
⇒西側の防御：西舘堀，百間堀　細長く南北に入る沖積地の利用
⇒奥州街道の付替え：本丸防御のため，直下を通る幹線道路を，西の台地上へ
⇒西側再外郭の空堀の掘削と土塁の構築
宝木台地(松が峰)から城内を覗き込まれないように
⇒武家屋敷：一条町から四条町　その外郭に下級武士の住まい



近世初頭と思われる城下図　　原図：前田育徳会所蔵